



地域支援センターだより

地域支援センターやわた

今年度第2回目の「スキルアップ研修会」を実施しました

12月20日（金）、京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻 准教授 加藤 寿宏 氏をお招きして「身体から子どもの学びを考える」という演題で御講演いただきました。保・幼・小、中、高等学校、特別支援学校の先生方、その他関係機関の職員の方、そして本校教職員を含めて110名以上の方々に参加いただきました。



講義では、どの年齢においても身の回りには箸や鉛筆、縄跳び等協調運動が求められることが多く、協調運動がうまくいかない不器用さは学業や日常生活、就労にも大きく影響してくることを解説していただきました。あわせて、協調運動の獲得や遂行が生活年齢や技能の学習及び使用の機会に応じて期待されるものよりも遅かったり不正確であったりしないか、という子どもをみる視点や、このような協調運動に障がいのある人たちへの支援の必要性が「発達障害者支援法」において示されていることを確認する機会にもなりました。

また、「身体化による認知」について、人は対象物を視覚・聴覚だけでなく自分の身体を使って認知していることや、身体と言語の関係について、名称を言える前の段階には身体で感じる感覚を言語に表現するという道筋があることから、目で見ることだけでなく身体が自由に使えることが大事になるということ学びました。

そして、覚醒と姿勢、刺激の関連について、授業中などに見られる爪かみや椅子を傾けバランスをとるような姿が、子どもによっては覚醒を保つための脳の調整行動として行っている場合があり、覚醒を促すためにどの場でも認められるような具体的な支援策が大切になることも教えていただきました。

さらに、発達障害のある子どもたちの協調運動障害に対するアプローチについてもお話しいただきました。「姿勢運動」では飛行機の姿勢やボールのように身体を曲げる姿勢など日常の中で楽しく取り組める内容、「書字」では早く書きすぎて運筆の調整がうまくできない子どもへの支援で紙やノートの下に紙やすりを敷くことでコントロールしやすくなるという手立てや、書字の支援では「同じ文字をどれだけ安定して書けるか」ということがみる視点として大切になることなどについて、映像を交えて実際に身体も動かしながら体験的に学ぶことができました。

今回の講義全般を通じ、身体の使い方や困っている子ども達をみる視点と個別に必要な支援について、新たな気づきと学びを得る機会となりました。

御参加いただいた方からの感想（一部抜粋）

- ・不器用さは運動だけでなく子どもの発達のいろいろな側面に影響を与える、という話を聞いて良かったです。（保・幼・こども園）
- ・なぜ不器用なのか脳についても話しを聞かせていただき、大変わかりやすかったです。（小学校）
- ・身体を見る視点をもう一度振り返りながらこれからも子どもの活動に生かしていきたいと思います。（その他関係機関）
- ・覚醒の程度によって対応の仕方が異なるので、一人ひとりに合った対応をしていきたいです。（小学校）
- ・特性を捉え「合法的」な対策を考えながら、学びやすい環境をつくっていくべきだと感じました。（小学校）
- ・学習と運動の相関、感覚と運動、覚醒と姿勢など、子どもたちの学びにくさの背景にあるものを改めて学ぶことができました。（支援学校）